

萩傳流Ⅲ — 付合 —

令和3年4月12日(月) ~ 18日(日)



元禄二年三月二十七日、松尾芭蕉は門人の曾良を伴って、江戸深川を出発した。『奥の細道』紀行である。千住から春日部・鹿沼・日光を経て、那須の黒羽の鹿子畑翠桃を訪ねたのは四月三日のこと。ここで歌仙を興行している。歌仙とは三十六句形式の連句のことで、発句から始まって、脇句から挙句までの付合（つけあい）が行われる。前句が長句（五・七・五）であれば短句（七・七）を付け、短句であれば長句を付ける。

今回の「萩傳流展」が四月に開催されるので、同じ四月に那須で興行された「秣（まぐさ）おふ」歌仙の表六句と名残の裏六句をイメージして、前者は茶盃を後者は自由作品を各人に提案してみた。連句の経験のない六人なので、どんな返事が返って来るかと案じていたが、幸い全員から挑戦するという返事が返って来た。しかし、この提案が吉と出るか凶と出るかは、作品が完成するまで分からない。

昔、茶道文化研究所の古賀健蔵氏に「茶の湯は文学です。だから、昔の茶人はみな連歌を嗜んだ」といわれ、中世の「花の下連歌」を思い出した。春、桜の下で死者を弔うために行われる連歌会で、念仏聖が連衆となつて座を動かし、一般大衆は投句する際、笠を着て匿名で付合に

参加する。それが、茶の湯の回し飲みの起こりともいわれている。「萩傳流展」の六名は、みな茶の湯を嗜んでいるので、こうした付合に挑戦することも、決して無駄ではないだろう。

歌仙では、芭蕉が「秣おふ人を枝折（しをり）の夏野哉」と発句を詠んでいる。季は夏。発句は巻頭の挨拶であるから、句姿が高く位が重んじられる。新庄紹弘氏の「茶碗銘」は、発句にふさわしく萩焼の伝統を重んじた格調高い仕上がりである。秣は牧草のことだが、作家は芒のような彫文で風流を表現している。自由作品の「皿銘」は、二寸が詠んだ名残の裏二句の「米とぎ散す瀧の白浪」をイメージした模様である。

発句の次に来る脇句は、発句を引き立てるのが役割で、発句と同じ季を詠む。歌仙では翠桃が「青き覆盆子（いちご）をこぼす椎の葉」と詠んでいる。句意は、なんのおもてなしもできず、お盆代わりに椎の葉に木苺を盛つたら、木苺がこぼれてしまったというもの。そこには、青い木苺のような未熟者ですという謙虚さが込められている。玉村信一氏の「萩茶盃銘」は、敢えてほのかな淡いピンクで木苺を表現している。自由作品は、桃里が詠んだ挙句の「弥生暮ける春の晦日」から、いま

最大の厄災であるコロナの終息を願って「萩香炉銘」清香（さやか）が出された。

三句目は一転の句である。歌仙では曾良が「村雨に市のかりやを吹とりて」と詠んでいる。季は雑。村雨が降り出し、店じまいした市場の情景を詠んだもの。坂倉正紘氏の「盃銘」は、萩の伝統に捉われない叩き技法で成形、風の動きを刷毛目で表現し、見事に転じている。自由作品の「オブジェ」は、芭蕉が詠んだ名残の裏初句「今日も又朝日を拝む石の上」から、太陽という自然と身体という自然を合体させたミニチュメントである。

四句目以下は平句である。この四句目については、分かりやすく軽きをよしとする。歌仙では芭蕉が「町中を行川音の月」と詠んでいる。季は秋。ひっそりと静まり川音だけが聞こえる。岡田泰氏の「白釉緑彩茶盃銘」は、その川音を表現したもの。白釉の上に澄んだブルーが美しい。自由作品の「淡青釉華器銘」は、名残の裏五句で秋鴉が詠んだ「珍しき行脚を花に留置て」から、蝶のように花が舞う情景を表現している。

五句目は、田原崇雄氏が箸鷹のシルエットを大胆に造

形化した「タタキ茶碗銘」箸鷹が、歌仙では翠桃が「箸鷹を手に居ながら夕涼」と詠んでいる。この作品は伝統的な萩焼に捉われることなく、秋の夕暮れの光景を見事に表現している。自由作品の「釉彩花入銘」は、名残の裏三句で曾良が詠んだ「旗の手の雲かと見えて翻り」から、雲のように旗がなびく様子を表現している。

第六句目は、歌仙では曾良が「秋草ゑかく帷子（かたびら）はたそ」と詠んでいる。季は秋。坂悠太氏の「練込貼合茶碗銘」は、白土を手捻りで成形した茶碗の一部を切り取り、色々な練込の土を張り合わせた縞々のピースを接着したもの。草木染の帷子をイメージして表現している。自由作品の「鬼土練込花入銘」は、名残の裏四句で翹輪（しりん）が詠んだ「奥の風雅をものに書つく」から、稜線を強調した練込模様によって風雅を表現している。

「萩傳流展」の六人の新たな挑戦にご期待下さい。

森 孝一

（美術評論家・日本陶磁協会常任理事）

ご来廊される皆様に、弊廊でのひとときをより安心して楽しみいただけますよう、下記の新型コロナウイルス感染予防対策を実施しております。恐れ入りますが、お客様のご理解とご協力を頂きますよう、よろしくお願い申し上げます。

1 大切なお客様へのお願い

- ・弊廊入口とビル入口に、アルコール消毒液を設置しております。ご来廊の際は、恐縮ですが、手指の消毒をお願い申し上げます。
- ・お出かけの際は、マスクのご着用をお願い申し上げます。
- ・現在、発熱がある場合や体調がすぐれない方は、申し訳ありませんが、ご来廊を見合わせて頂きますよう、お願い申し上げます。
- ・過去2週間以内に、発熱や風邪で受診や服薬等をした方、および海外への訪問歴のある方は、ご来廊をお見合わせ頂きますよう、お願い申し上げます。
- ・店内の混雑緩和のため、出来る限り、少人数でのご来店をお願い申し上げます。
- ・コロナ禍までは、お客様にお出ししていた玉露などの呈茶のサービスを、申し訳ありませんが、当面の間、控えさせていただきます。

2 弊廊として取り組んでいる事

- ・弊廊内に高機能換気システム「ロスナイ」（三菱電機製）を令和3年1月6日に導入致しました。この新しく強力な換気設備により、15~20分に一回は、弊廊内の全ての空気が入れ替わる事になります。
- ・加えて、入ロドアは常時開放し、一層の換気に務めております。
- ・手指消毒用のアルコールは、SHISEIDOの消毒液を使用しています。手に優しい保湿成分を配合しているとの事で、皆様にご好評を頂いております。
- ・日常清掃をより強化致します。
- ・お客様やスタッフが頻繁に手を触れる、エレベーターのボタン、テーブルと椅子、入ロドアとトイレの取っ手、筆・ペンなどのアルコール除菌を営業中にも定期的に行います。
- ・弊廊内が多くのお客様で混雑し、密になると判断すれば、弊廊への入場制限をお願いする場合があります。
- ・弊廊スタッフはマスクを着用し、検温や体調管理、アルコールによる手指消毒を徹底して、接客に務めさせていただきます。
- ・令和3年1月20日、スタッフ全員のPCR検査（にしたんクリニック）を行い、全員、陰性でした。なお、今後も四季折々にPCR検査を実施してまいります。

コロナ禍の影響で、会期と営業時間の変更や、オンライン展示のみの可能性もございます。
お手間で恐縮ですが、弊廊ホームページや公式SNSにて、最新情報をご確認頂ければ助かります。

会 期 令和3年4月12日(月)~18日(日)
会期中無休

開 廊 時 間 11:00 ~ 19:00
※ 最終日の4月18日(日)は17:00 まで

出 品 作 家 岡田 泰 4月15日(木)~18日(日)
[在廊予定日] 坂 悠太 4月15日(木)~18日(日)
坂倉正紘 4月12日(月)~15日(木)
新庄紹弘 4月15日(木)~18日(日)
田原崇雄 4月12日(月)~15日(木)
玉村信一 4月15日(木)~18日(日)

※ 恐れながら、コロナ禍の影響で、変更になる可能性があります。
ごさいます。

会 場

柿傳ギャラリー
KAKIDEN GALLERY

〒160-0022 東京都新宿区新宿 3-37-11 安与ビル地下2階
(JR新宿駅 中央東改札より徒歩1分)

TEL 03-3352-5118 / FAX 03-5269-0335

MAIL gallery@kakiden.com

http://www.kakiden.com/gallery



柿傳ギャラリー HP



公式 Instagram



特別展観

当初4月15日(木)に、「旅」を主題とした記念茶会を予定していましたが、コロナ禍で残念ながら開催を見合わせました。
そこで、茶会で用いる予定だった道具を柿傳茶室にて設え、特別展観致します。
どうぞギャラリーでの展示と合わせてご覧頂ければ幸いです。

- ・日時 令和3年4月15日(木) 11:00 ~ 18:00
- ・会場 新宿 柿傳9階 茶室「残月亭」(弊廊と同じビル)
- ・会費 無料



玉村信一

Tamamura Shinichi

初表 式 [脇匂] 青き覆盆子をこぼす椎の葉 一翠桃一

昭和 44 年 山口県萩市に生まれる
平成 12 年 広島大学大学院 社会科学研究科 法律学専攻 博士課程前期修了
父、登陽に師事。作陶を始める。
平成 13 年 第 36 回 西部工芸展入選 (以後 9 回入選)
平成 19 年 第 1 回 韓国・萩陶芸交流展出展 (ソウル) 第 5 回展まで連続出展
萩市美術協会会長賞
平成 20 年 現在形の陶芸 萩大賞展 I 入選 (以後 3 回入選)
平成 26 年 第 61 回 日本伝統工芸展 入選 (以後 3 回入選)
平成 27 年 第 23 回 日本陶芸展入選 (以後 1 回入選)
平成 29 年 萩傳流一若手作家六人展一 (柿傳ギャラリー)
平成 31 年 萩傳流II一瀬觸より展一 (柿傳ギャラリー)
令和 元年 現在形の陶芸 萩大賞展 V 審査員特別賞

萩茶盃「覆盆子」
φ13.8×H8.3 cm



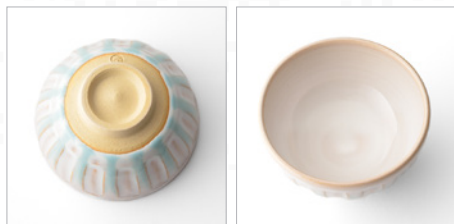
新庄紹弘

Shinjo Akihiro

初表 壺 [発匂] 萩おふ人を枝折の夏野哉 一芭蕉一

昭和 60 年 新庄助右衛門窯 十四代 貞嗣の長男として、山口県長門市に生まれる
平成 22 年 早稲田大学 卒業
平成 25 年 京都市伝統産業技術者研修 修了
父のもとで作陶を始める
平成 29 年 萩傳流一若手作家六人展一 (柿傳ギャラリー)
平成 31 年 萩傳流II一瀬觸より展一 (柿傳ギャラリー)

茶碗「萩」
φ12.1×H7.5cm



岡田 泰

Okada Yasushi

初表 四 [四句] 町中を行川音の月 一芭蕉一

昭和 51 年 山口県萩市に生まれる
平成 14 年 東京造形大学 美術学部 彫刻科 卒業
平成 17 年 京都市工業試験場 陶磁器専修科 修了
平成 21 年 日本伝統工芸展 (以後 11 回入選)
平成 25 年 菊池ピエンナーレ奨励賞、日本伝統工芸展 60 回記念「工芸から KOGEI へ」展出品
平成 27 年 日本陶芸展 優秀作品賞・毎日新聞社賞
平成 28 年 山口伝統工芸展 日本工芸会山口支部長賞
平成 29 年 エネルギア美術賞、山口県芸術文化振興奨励賞
萩傳流一若手作家六人展一 (柿傳ギャラリー)
平成 31 年 萩傳流 II 一瀬鱚より展一 (柿傳ギャラリー)
令和 元年 現在形の陶芸 萩大賞展 V 優秀賞

父 岡田 裕 (山口県指定無形文化財 萩焼保持者) に師事

白釉緑彩茶鉢「川音」
φ13.1×H7.5 cm



坂倉正紘

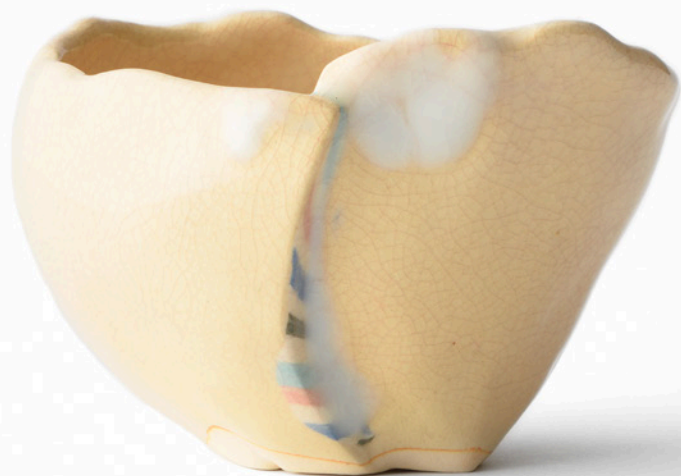
Sakakura Masahiro

初表 参 [第三] 村雨に市のかりやを吹とりて 一曾良一

昭和 58 年 山口県生まれ 父は十五代坂倉新兵衛
平成 21 年 東京藝術大学 彫刻科 及び 大学院 彫刻専攻 修了
平成 23 年 京都市伝統産業技術者研修 修了
平成 29 年 ディスカバリーチャンネル「明日への扉」出演
萩傳流一若手作家六人展一 (柿傳ギャラリー)
平成 31 年 ブレイク前夜 (BS フジ) 出演
萩傳流 II 一瀬鱚より展一 (柿傳ギャラリー)
令和 元年 現在形の陶芸 萩大賞展 V 佳作
令和 2 年 初個展 (柿傳ギャラリー)

鉢「飄風」

W16.0×D11.9×H8.2cm



坂 悠太

Saka Yuta

初表 陸 [六句] 秋草^{かたばら}ゑがく帷子はたそ 一曾良一

昭和 63 年 母 坂 純子（のち十三世 高麗左衛門）より山口県美東町に生まれる
平成 22 年 京都造形芸術大学 美術工芸学科 陶芸コース 卒業
平成 23 年 京都府立陶工高等技術専門学校 修了
平成 25 年 京都市産業技術研究所 伝統産業技術後継者育成研修 陶磁器応用コース 修了
萩に戻り、母 十三世高麗左衛門の下で作陶に入る
平成 26 年 十三世死去に伴い坂高麗左衛門窯を継承する
平成 29 年 萩傳流一若手作家六人展一（柿傳ギャラリー）
平成 31 年 萩傳流II一濫觴より展一（柿傳ギャラリー）
令和 元年 現在形の陶芸 萩大賞展 入選
令和 2 年 茶の湯の造形展（島根／田部美術館）入選

練込貼合茶碗「染の帷子」^{かたばら}
W14.8×D12.9×H9.2cm



田原崇雄

Tahara Takao

初表 伍 [五句] 箸鷹を手に居ながら夕涼 一翠桃一

昭和 57 年 山口県長門市に生まれる
平成 17 年 東京藝術大学 卒業制作展 菅原賞
平成 19 年 同大学大学院 美術研究科 彫刻専攻 修了
平成 22 年 美濃にて修行（師 豊場惺也先生）
平成 23 年 父 十三代 陶兵衛に師事 作陶に入る
平成 28 年 日本伝統工芸展 入選（以後 5 回入選）、山口県美術展 優秀賞
平成 30 年 エッフェル塔茶会【フランス・パリ】
平成 29 年 萩傳流一若手作家六人展一（柿傳ギャラリー）
平成 31 年 山口伝統工芸展 日本工芸会山口支部長賞
萩傳流II一濫觴より展一（柿傳ギャラリー）
令和 2 年 日本陶磁協会 現代陶芸奨励賞 中国・四国展「鑑賞」部門 奨励賞

現在、日本工芸会 正会員

夕影茶碗「箸鷹」
φ16.2×H7.2cm



新庄紹弘

Shinjo Akihiro

名残 式 [脇匂] 米とぎ散す瀧の白浪 一二寸一

皿「白浪」
φ27.4×H4.0cm



坂倉正紘

Sakakura Masahiro

名残 壺 [発匂] 今日も又朝日を拝む石の上 一芭蕉一

拝日の徒
W17.6×D8.8×H28.5cm



坂 悠太
Saka Yuta

名残 四 [四句] 奥の風雅をものに書つく 一翹輪^{しりん}一

姫-鬼土練込花入「奥の風雅」
W10.9×D9.0×H25.4cm



田原崇雄
Tahara Takao

名残 参 [三句] 簇の手の雲かと見えて翻り 一曾良一

釉彩花入「旗雲」
W13.2×D13.0×H24.8cm



玉村信一

Tamamura Shinichi

名残 陸 [挙句] 弥生暮ける春の晦日 一桃里一

菖香炉「清香」
W11.9×D9.8×H13.6cm



岡田 泰

Okada Yasushi

名残 伍 [五句] 珍しき行脚を花に留置て 一秋鴉一

淡青釉華器「碧蝶花」
W15.2×D16.0×H22.0cm

過去の萩傳流展



萩傳流 一若手作家六人展—
平成 29 年 7 月 5 日 (水) ~ 11 日 (火)



萩傳流 II 一瀬鯨より—
平成 31 年 2 月 5 日 (火) ~ 11 日 (月)



新宿で大人の道草を。
萩傳流ギャラリー
KAKIDEN GALLERY

価格表

作家名		作品名		本体価格/円 (税込価格/円)	作品サイズ (cm)
1	新庄紹弘	茶碗「 ^{まぐさ} 林」 [桐箱付・後日]	P6	75,000 (82,500)	φ 12.1×H7.5
2	玉村信一	萩茶盃「覆盆子」 [桐箱付・後日]	P7	100,000 (110,000)	φ 13.8×H8.3
3	坂倉正紘	盃「飄風」 [桐箱付・後日]	P8	130,000 (143,000)	W16.0×D11.9×H8.2
4	岡田 泰	白釉緑彩茶盃「川音」 [桐箱付・後日]	P9	150,000 (165,000)	φ 13.1×H7.5
5	田原崇雄	夕影茶碗「箸鷹」 [桐箱付・後日]	P10	110,000 (121,000)	φ 16.2×H7.2
6	坂 悠太	練込貼合茶碗「染の帷子」 ^{かなびら} [桐箱付・後日]	P11	90,000 (99,000)	W14.8×D12.9×H9.2
7	坂倉正紘	拝日の徒 [桐箱付・後日]	P12	80,000 (88,000)	W17.6×D8.8×H28.5
8	新庄紹弘	皿「白浪」 [桐箱付・後日]	P13	35,000 (38,500)	φ 27.4×H4.0
9	田原崇雄	釉彩花入「旗雲」 [桐箱付・後日]	P14	75,000 (82,500)	W13.2×D13.0×H24.8
10	坂 悠太	姫-鬼土練込花入 「奥の風雅」 [桐箱付・後日]	P15	40,000 (44,000)	W10.9×D9.0×H25.4
11	岡田 泰	淡青釉華器「碧蝶花」 [桐箱付・後日]	P16	180,000 (198,000)	W15.2×D16.0×H22.0
12	玉村信一	萩香炉「 ^{さやか} 清香」 [桐箱付・後日]	P17	60,000 (66,000)	W11.9×D9.8×H13.6



160-0022

東京都新宿区新宿 3-37-11

柿がやらい
KAKI DENZ GALLERY